

研究アプローチ活動報告

OGUCHI, Masashi / 小林, ふみ子 / クライナー, ヨーゼフ /
王, 敏 / 安孫子, 信 / 小口, 雅史 / KOBAYASHI, Fumiko /
KREINER, Josef / WANG, Min / ABIKO, Shin

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学 / INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

231

(終了ページ / End Page)

253

(発行年 / Year)

2015-12-22

研究アプローチ活動報告

研究アプローチ① 小林ふみ子 … 231

研究アプローチ② ヨーゼフ・クライナー … 240

研究アプローチ③ 王 敏 … 243

研究アプローチ④ 安孫子 信 … 247

電子図書館の構築 小口 雅史 … 250

研究アプローチ①「〈日本意識〉の変遷—古代から近世へ—」

アプローチ・リーダー：小林 ふみ子

アプローチ①では、日本の歴史をさかのぼって、さまざまな地域・階層・ジェンダーの人々が、どのような時に、どのように〈日本〉という枠組みを意識したのか、今日に残る言説や視覚的資料からその変容を探り、さらにそこに近代の国家主義的な意識とどのような連続と断絶があるのかを探った。

このような研究は、これまでおもに日本思想史・政治思想史などの領域で、一部の傑出した思想家たちの言説に依拠して行われることが多く、そうした文献に触れられる限られた支配階層・知識人層の認識をかいま見るとどまっていた。本研究では、できるかぎり多様な地域・階層・ジェンダーの人々の意識を探るべく、おもな研究対象を、近世において飛躍的に享受者層を拡大した出版物や芸能に据えた。アプローチメンバーに加えて、ときどきに各分野の専門家から協力を得つつ、それらの出版物や芸能などを通じて多くの人びとに共有された〈日本〉に対する認識がどのようなものであったかを探究し、以下の6点のような知見を得た。

(1) 近世における〈日本意識〉の広まり

近世までは、一般の人びとは藩を超えた意識はほとんどもたなかったとする通俗的な言説が行われてきた。しかし、実際には、各藩の上に幕府があるといった政治的な統合に加え、街道や回船航路を通じた交通の統合とそれを通じた経済・流通の統合、書物の普及によって、武士以外の階層にも確実に〈日本〉の認識があったことはこれまでも指摘されてきた。本研究では、さらに寺子屋・手習いの教材とされるような実用・啓蒙書に掲載された地図、各国の地理や交通網を記した書物・絵図の普及を確認し、近世初期から後期にかけての識字層の拡大にともなって、階層・地域・ジェンダーの差はあるとはいえ、〈日本〉を単位とする認識がかなり一般化しており、それは近代の学校教育をまつものではなかったことを確認した。

とはいえ、本研究においては、その前提として、近代化以前の日本に生きた人びとのアイデンティティにとって、〈日本〉はそのまま自己とつながると

は限らなかつたということも考えるべき要素として提起された。自身の属する地域社会と切り離され、その存在を超越した「お上」、あるいは観念的知識としてあるという感覚もあれば、生まれ育った土壌という認識が身近な地域社会から連続的に「国」という枠にまでつながって捉えられる場合もあろう。この列島で生まれ育った人と一口に言っても、知識レベルや居住地域、階層、ジェンダーなどの要因によって、それぞれ、〈日本〉という枠組みとの距離感には多様であつたであろうことを視野に入れて論じる必要性が唱えられた。

(2) 「国」を意識するとき

とはいえ、どのような人であっても日常生活を送るうえでつねに「国」を意識するわけではない。そのことは、われわれアプローチメンバー自身、本研究期間中に東日本大震災に見舞われ、にわかに「がんばろう日本」がさかんに叫ばれるようになったことによって強く実感された。これまでの研究でも、13世紀の元寇、また幕末の黒船来航を象徴的な例としてたびたび語られてきたことではあるが、本研究ではとくに近世における災害その他の危機における〈日本意識〉に焦点を当てた。三都の都市機能にも影響した富士山や浅間山などの火山大噴火や大地震、大洪水、大火災などの災害、また19世紀初頭以降、たびたびロシア・英国などの外国船が来航したことについての情報が広まることによってかき立てられた対外的な危機意識の高まり、またとくに幕末に見られる疫病の流行をめぐる言説や視覚的資料から、大衆レベルの危機意識が、危機的事象のいかんを問わず、歴史的にも「国」の危機として認識されやすかつたことが判明した。自然災害も「神軍（かみいくさ）」として捉えられ、これがかつての蒙古襲来の記憶「ムクリコクリ」に重ねて恐ろしいイメージとしてくり返し表象されたことが論じられた。「国難」と認識されるような何らかの大きな危機に見舞われ、危機意識が高まるたびに、大衆的な読み物や演劇や見世物などの芸能によって過去の脅威の記憶が呼び戻され、恐怖心をあおるとともに「神国」への加護を描く表象が繰り返され、人びとに浸透していったさまが明らかにされた。とはいえ、それは非常時だけのものではない。対外関係をめぐる危機意識や対抗的な意識を反映して生み出された作品世界——豊臣秀吉による朝鮮出兵を描く朝鮮軍記物、日本人の血を引いた鄭成功の活

躍を描く国性爺物、異国討伐に成功したとされた百合若大臣物、南島を股に掛けて活躍した源為朝を主人公とする物語などが、平時においても読み物や芸能という娯楽として消費され続けることで、民衆レベルで擬似的に異国との対抗を意識させていた様相も浮かびあがらせることができた。

(3) 中国の華夷意識の移入による国別序列感覚

日本に生きた人びとにとって、もっとも古くからある世界認識の方法が三国世界観、すなわち仏教の発祥地であるインド=天竺、それを受けて漢字文化のなかで発展させた中国、そして本朝という把握のしかたであること、また古代より日本人はそうした仏教伝播の経路において世界の辺境にある卑小な存在として自らを位置づけてきたことはよく知られている。その劣等感の裏返しとして、中世には自国、自民族中心主義的な反本地垂迹説のような思想も生まれたことも周知の事実である。さらにこうした仏教的世界観のものとの自己認識のうえに、中国が周辺異民族を支配して形成した華夷意識をも移入して、日本を中心におく日本型華夷意識を発達させたこと、それが学問的には漢学に対抗する国学として結実したことも知られている。本研究では、この点においても近世の大衆文化の観点から考察を加え、日本型華夷意識が大衆レベルでどのようなかたちをとってその〈日本意識〉を形成したのかを研究した。

近世に入って、漢籍からの知識に加えて西洋の博物学による知識が入ったことで、近世日本の大衆が手にする書籍のレベルでは中国由来の古典的世界観と西洋の世界認識が奇妙な融合を見せる。本研究では、寺島良庵『和漢三才図会』のような事典的書物からより娯楽的な異国絵本まで、異国の人物を図示しその特殊な風土や慣習を説明する書物が少なからず出されたことをふまえ、当時の人びとが「国」というものを固有の民族・風土・言語・習慣の総体として認識するという素朴な観念で捉えていたことが確認できた。そのうえで、そこにおいて東アジア、すなわち中国・朝鮮などとの関係では、華夷意識をそのまま移入して自らに中心を置いてこれら近隣諸国を「異国」とし、その外側に位置づけた西洋諸国や女護が島や小人国、手長島といった想像上の奇妙な異国も含めた「外夷」とは一線を画するものとする世界観がさまざまなかたちで人びとの間に広まっていたことについて考察した。

東アジアのなかでは、古代からの大国であり文明の発信地であった中国に対して、敬意と劣等感を抱きつつ、それに対抗し得る自国優越意識を抱こうとする両義的な心性が、思想史レベルだけでなく、大衆文化レベルでも、能（謡曲）や人形浄瑠璃・歌舞伎などの芸能から読み物や絵本類までさまざまなかたちで広範に認められることを指摘した。また中華文明の受容にあたって朝鮮と競合関係にあり、そこにおいて日本が立ち勝っている（はずだ）ことという認識もまた古くより見られる。近世に入っても朝鮮通信使などを通じた交渉だけでなく、過去の豊臣秀吉による朝鮮出兵を描くいわゆる朝鮮軍記物の読み物やその挿絵などによって再生産され続けたことも確認した。

このような華夷意識的な発想から、多国間関係を水平なものとして捉えるのではなく、序列化を図り優劣を競い合うことが生じてきたと考えられるが、これが東アジアに特有のもの捉えるべきなのか、近代以前から民族主義にとまなう比較的普遍的な現象であったのかについては、さらに広範な比較対象を視野に入れた検討を要することといえよう。しかしいずれにせよ、そのように東アジア諸国において自国中心的に各国を優劣の関係で捉える認識が、歴史的に形成され、それが支配層・知識階層だけでなく、出版物の流通によって身分やジェンダーを超えて広く全国的な影響力を持っていたことが確認できた。その後、近代の琉球併合や東アジアに対する植民地政策を大衆レベルで肯定するような意識と連続するものであり、さらにいえば現代の東アジアの国際関係に対する認識の問題の根深さを確認させるものとして、重要な成果であったと考える。

(4) 蝦夷と琉球

前項のような華夷意識によって、中心と周縁として国の関係を捉えようとする認識枠組みは、蝦夷や琉球という異国との境界領域にも適用され、さらにその内側でも都一鄙、中央一地方をめぐる価値認識にも影響した可能性も論じられた。この蝦夷や琉球を視野に入れた日本文化の複数性・重層性についての研究は、歴史的な経緯から法政大学が強みとしてきた領域であり、それは本研究においても生かし得たと考えている。

東北については、蝦夷の位置づけともかかわって、日本において古代より東

北が未知の世界、文化の及ばない他者的な存在として扱われ、日本型華夷意識を支えるものとされたこと、近世にあっては国という形式をとらない蝦夷が大衆的な読み物を通じて人びとの想像力のなかで都合よく扱われ、徐々にその内側に取り込まれていくという、近代における扱いとの連続性も見いだされた。

琉球は、近世初頭の薩摩藩による侵攻以後、その「付備国」として従属的な位置におかれつつも、大衆的認識レベルでは「異国」とされたこと、むしろ日本型華夷意識を成立させるべく「夷」の存在が必要とされたために積極的に「異国」として演出されたことが、従来、指摘されてきた。それに加えて本研究では、近世の出版物やその他写本で行われた琉球をめぐる言説や絵画資料において、琉球の人びとが日本（＝ヤマト）の言語や慣習、文学や芸能文化に倣うさまがくりかえし描き出され続けたことを明らかにした。それによって琉球が「日本を尊びその文化を受容する国」という物語とともに性格づけられ、日本（ヤマト）の側の恣意によってその自尊心を支える存在として消費されたことが浮かびあがる。この点でも、本土の人びとが沖縄をどう見るかという、現代につながる問題の根の深さを指摘し得たと考える。

(5) 「武」と「和」という特質の認識と「神国」言説の連続性

日本型華夷意識の形成にあたって、儒学（＝文）によって統治される国としての中国・朝鮮との対比において、武家が統治するこの国の優越性を主張する根拠として「武国」であることを挙げる言説が兵学・儒学の文献において展開されたことは日本思想史などの領域で従前から指摘されてきた。本研究では、そのような「武国」としての〈日本意識〉が、大衆レベルの読み物や芸能、視覚資料でどのように普及したかを探った。このような言説が、一部の知識人に享受されるだけの学問的著作にとどまらず、人形浄瑠璃や歌舞伎や読本をはじめとする読み物・絵本などにおいてもくり返されて一定の普及をみたであろうこと、それはこの国の歴史を歴代の「武者」たちに代表させて描く武者絵や武者絵本として視覚化されたことで広範に支えられたであろうことが論じられた。さらに、その「武国」言説の内実にも幅があり、単純に中国や朝鮮とは異なる「武国」であることをいうだけでなく、和漢兼学、文武両道を以て日本の優越性を語るような、いわば単純な排外的発想とは位相を異

にする言説も行われたことも指摘された。

一方で、本研究においてはそれと相反する「和＝やわらかい国」「平穏な国」としての〈日本意識〉が中世以来連綿とあり、それが近世において好色を意味するものとして特異な変容を遂げたことも明らかになった。それは、この国の呼称に「倭」を改め「和」の字が採用されたことについての根拠や経緯さえ明らかでないものの、中世の歌論などよりその字義に実態の反映を幻視しようとしたことから生じてきたことが指摘された。「和」、あるいはその和訓「やわらか」という言葉は、平らかであったり安らかであったり、また円満であったり、さらには色好みであったりと多様な意味をもち、その語義の広がりには合わせるかのように、この国の風としてあえて実質的な意義を見いだすことが模索された。それが記紀の伊弉諾・伊弉冉による国生み神話や『伊勢物語』『源氏物語』といった「色好み」の古典文学を奉じる国であることと重ねられ、近世において春画・艶本を含む好色の文化の盛行を支える根拠とされたことも見逃せない点として研究された。そのことは近代以降の日本において、抑圧されつつも奇妙なたちで発達した性意識・規範の根を考えるうえで重要といえようが、それは今後の課題として残された。

「武」と「和」という二つの特質は明らかに矛盾しながらも、他方で武威による泰平の実現として辛うじてそれとつながりあうという両義性をもつ。後者は近代の富国強兵から軍国主義への歩みのなかで忘れ去られていくことになる一方で、前者は日本の固有の特質とみなされて、そうした日本をそのまま支えるものとなっていくものとされる。とはいえ、そのような「武」もまた、近世当時にあっては東アジア的に共有される忠孝の理念と結びつけて語られることもあり、単純な理解を許さないものであることも見えてきた。こうした奇妙なねじれは、文化本質主義的な自国認識の虚構性を示唆していると考えられよう。

本研究では、このような「武」、「和」いずれの特質もその根拠が記紀神話に求められたことにも注目した。「和」の国であるのは『古事記』において伊弉諾・伊弉冉に鶴鴿が男女の道を教え、その和合からこの国が生まれたときから始まるとされることを根拠とするもので、近世の通俗神道において唱えられたものである。「武国」であることもまた、同じ時に伊弉諾・伊弉冉が混沌

とした大地を固めるのに与えられた道具が「天之瓊（沼）矛」という武器であったことに起源を求めるものであり、こうして記紀神話に依拠する二説を並べて考えることよって、いずれも幻想にすぎないことが見えてくる。

さらに、幕末における現実としての異国の軍事的脅威に対して、このような言説に基づくいわば異次元の、想念のレベルで「神の国」であることをもちだして、異国の軍事力との非対称を解消しようとする、今日の日からすると荒唐無稽にしかみえないような動きが、幕府から、大衆文化レベルにまで広範に認められることも指摘された。それはその後も、欧米列強に対して対外的な危機意識を高めていく時代になると自尊心のよすがとして動員され、いわば論理を超越したところでこの国の人びとの虚勢を支えた。まさに近代の軍国主義の精神構造の萌芽がここにあったということになる。

(6) ジェンダーという要因との関係

古代からこの国において「国字」とも称されたかな文字を「女手」と呼んで、「男手」としての漢字に対比させた事実、あるいは漢文ではなくかなで綴る和語によって日記を書く行為をあえて女性に仮託した紀貫之『土佐日記』の冒頭を想起するとき、女性性と日本的特質とされることとが密接に関わるものとされてきたのではないかと推測される。近現代において女子教育のなかで「国文学」が大きな位置を占め、日本女性らしいたしなみとして茶道や華道といった伝統的な習い事が推奨されてきたことをもっても、広がりをもつ課題といえよう。そこで本研究では、その点にも焦点を当て、〈日本〉というものが女性らしさとどのように関わって論じられたか、その言説を追った。

しかし、意外にも、近世までの言説のなかにとりたてて両者を結びつけて考えるものが目立って見いだせるものではないことが判明した。国学者賀茂真淵は『万葉集』に「ますらをぶり」を見てそれを理想的な詠風と考え、一方、数多く抱えた女性門人たちにはのちに「たをやめぶり」と称する『古今和歌集』風を勧めたが、国学者としてその学問全体が〈日本〉を対象とするという以上には、いずれにおいても特定の風を〈日本〉と結びつける発想はなかったと推測されることが報告された。また近世の女訓書などに基づいて、女性たちの琴や手習い、詠歌、そして茶の湯といった稽古事についても、当時理想的

な女性像をめざした修練ではあれ、そこに他国の女性との差異を意識した〈日本〉らしさを実現するといったような意識は、近世以前にはおそらく介在しないであろうという推測がなされた。

また女性歌人たちの志向、とくに歴史を詠った詠史和歌、只野真葛の思想的著述なども俎上に載せて、その〈日本意識〉を検討したが、同時代の男性文人たちと志向性の面において大きな差異は認めがたいということがわかった。

むしろ近代に入って、明治なかばに国民国家体制確立の装置の一つとして国文学研究を成立させるにあたり、男性である国文学者たちは、日本文学の主流と位置づけるべき王朝物語や和歌などの和文学のもつ「女性的」性格に居心地の悪さを感じ、積極的に男性性を見いだすことに腐心したさまが見いだされた。しかし他方、女子教育史を繙いても、王朝女性の手にかかる文学が積極的に活用されたという形跡は認められないことも指摘された。このようにこの国の文学史の主流に平安女性文学を位置づけ、そこに女性的性格を見るという発想そのものが、近代「国文学」におけるカノン形成の産物であると考えられる。

〈日本〉、和なるものをめぐって、漢との対比において女性性を見る発想自体は王朝文学のなかにないではない。しかし、そのことと現実の広い意味での女性の「女性らしさ」は別のことであったと考えるべきであろう。男性による言説が主流をなし、「女護の鳥」「女人鳥」の实在がなかば以上に信じられてそこに他者性を見ていた時代、〈日本意識〉と女性性が結びつくはずもなかったということになる。

まとめ

以上、6項にわたって、本研究で得られた知見の概要を提示した。古代以来の仏教的三国世界観と、中国から伝来した華夷意識においては、日本はいずれにせよ辺境の小国として位置づけられざるを得ない。そのことを受容しがたかった日本の人びとが、そうした序列的認識の羈絆を相対化する方向に向かうのではなく、あえてそれを反転しようと挑み続けたこと、またそのような発想は一部の支配階層や思想家だけのものではなく、近世にあっては大衆文化を介して大きな広がりをもったことがあきらかになった。現代の東アジア各国に特徴的に見られる大衆レベルでの対抗的意識の根が、このような各

国を序列化しようとする華夷意識的発想にある可能性は十分にある。そのような意識構造のもとに、近世においてすでに琉球や蝦夷が日本型華夷意識を支えるものとして、組み込まれていったことも銘記すべきであろう。

そうした外来思想による序列の転換、日本型華夷意識の構築の試みにおいて、日本の優越性を主張するための最後の抛りどころとなされたのは、結局のところ記紀神話や神道説でしかなかった。近世の神道が、仏教やときに儒学、あるいは道教由来の神々とも習合しつつ、他方ではっきりとした合理的な精神の芽生えによって強固な信仰とは言い得ない状況になっていたことを鑑みると、それはいかにも脆弱な基盤にしかみえない。逆にいえば、「神国」といおうと、「武国」「和国」といおうと、その程度のゆるりとした、いわば半信半疑といった程度の認識であったということであろうし、それを要請する切実さもそのくらいでしかなかったということではないか。出版や芸能を介した大衆的想像力は、むしろそうした切実さを欠く観念的な異国との対抗心をたくみに刺激することによってさまざまな作品を生み出したともいえる。災害や対外的な脅威など、「国難」と感じられるような事態以外にも、大衆は異国との対峙を想像しては興奮を覚え、それを娯楽として消費したのであった。

それが幕末に至って現実の具体的な脅威と向き合ったときにも、相変わらずそのような記紀神話や神道を根拠とする自尊心を以て対応しようとしたことは今日からみると荒唐無稽でしかない。しかしその後も近代国家の中心に天皇制を据え、国家神道を作りだしてむしろそれに本気ですごった近代日本の行方は、そのこと自体のなかに脆弱さをはらんでいたことが浮かびあがる。本研究の射程に照らすことによって、そのような近代日本の〈日本意識〉ないし国家意識のもつ脆さや危うさが見えてきたといえよう。

研究アプローチ②

「近代の〈日本意識〉の成立—日本民俗学・民族学の問題」

アプローチ・リーダー：ヨーゼフ・クライナー

2014年10月3日、4日に2014年度研究会「両みんぞく学のパラダイムの検討」が行われた。これまで、アプローチ②「近代の〈日本意識〉の成立—日本民俗学・民族学の問題」は年度ごとに次のような課題を設定して研究活動を行ってきた。すなわち、2010、2011年度は昭和10年代から昭和20、30年代を対象に、日本が植民地を有する帝国から、いくつかの少数民族はいるものの、ほぼ単一民族の国家に変わった時期にエスノロジーとフォークロアがどのようにパラダイムシフトを行ったかを中心に研究が進められた。2012年度は、「日本の民族学の父」と呼び得る岡正雄の業績を討論し、ヴィーン大学に提出した博士論文 *Kulturschichten in Alt-Japan* を出版した。さらに2013年度は、20世紀の日本の民族学において最も重要な役割を果たした5人の研究者、すなわち鳥居龍蔵、洪澤敬三、金閔丈夫、梅棹忠夫および佐々木高明を取り上げ、その業績を検討した。今回は2010年度から2013年度までの成果の総括として両みんぞく学のパラダイムを検討するため、民俗学と民族学の分野で画期的な業績を残した坪井正五郎、坪井洋文、宮田登の3名を対象に考察を行った。

10月3日は「坪井正五郎の業績」を主題に、清水昭俊先生（国立民族学博物館名誉教授）と川村伸秀先生（編集者）が、10月4日は「坪井洋文・宮田登の業績」の主題の下に福田アジオ先生（国立歴史民俗博物館名誉教授）が報告を行い、ヨーゼフ・クライナー（国際日本学研究所客員所員）が講演「「近代の〈日本意識〉の成立—日本民俗学・民族学の問題」について」を行った。

まず、清水先生は「坪井正五郎の人類学 人類学の坪井正五郎」と題し、人類学を確立した坪井正五郎の学問上の構想の特徴と実際を検討した。具体的には、好奇心に満ちた趣味人であった坪井正五郎が東京帝国大学在学中にモースやシーボルトなどの在留外国人の取り組みを通して人類学に接するとともに、英仏への3年間の留学を経て東京帝国大学人類学講座の教授となったものの、当時の人類学講座が人材育成の機能を欠いていたため、講座を運営する実働組織である人類学教室と外郭組織の東京人類学会を通じて人材の確保と育成を

行ったことが報告された。また、坪井が留学時代に学んだ欧米の人類学の知識を総合して、専門分野へと分化・分離しない、人類の全体の理解を目指す包括的な人類学を構想したものの、各地の「人民」を民族文化と関連付けて「民族」として把握する視点を持っていなかったこと、さらに「人類学—人種学及び考古学—土俗学」という階層関係を想定しながらも土俗学を人種学に関連付ける理論的視点を欠いていたこと、あるいは包括的人类学を構想する過程で青年期の坪井の独創的な発想が削がれたことが説明された。そして、人類学教室で行われた人材の育成は鳥居龍藏、八木奘三郎、松村瞭などを輩出したものの、坪井の包括的な人類学が個別の分野へと専門分化した過程であったことが示された。

次に、編集者として文化人類学者の山口昌男の著作の編集に携わるとともに2013年には『坪井正五郎—日本で最初の人類学者』を上梓した川村先生が「逸脱する人類学者—坪井正五郎と山口昌男」と題して発表を行い、坪井正五郎と山口昌男の足跡を「西洋とのつき合い方」、「絵を描く—笑いと遊び」、「人類学と文学と」、「交流の場をつくる・利用する」、「人類学の広告塔」の5つの観点から対比させた。その結果、時代も環境も異なる二人が、民族学と文化人類学という学問の発展のために行った取り組み、社会との関わり方、あるいは学問の分野を超えた人的な交流の幅の広さという点で類似する要素を数多く持っていることが明らかになった。

福田先生は「坪井洋文と宮田登—アカデミック民族学確立の立役者」と題する報告を行った。まず、柳田國男が宮崎県椎葉村で実地調査を行った1908年に始まる日本の民俗学の歴史を概観した後、坪井洋文と宮田登の学問的な特徴が検討された。その結果、國學院大学で井之口章次が指導する民族学研究会に入って柳田國男流の比較研究の手法を学んだ坪井洋文は卒業論文の主査であった折口信夫から直感から仮説を得る方法を学び、聴講生となった東京都立大学では岡正雄流の種族的文化複合論を修得した。そして、こうした学問的な前提に基づき、日本の文化の地域差、地域性に着目して「餅なし正月」に畑作文化の痕跡を認め、柳田國男の稲作文化論を批判するという日本文化多元論研究を行った。さらに、折口流の直感によって得られた着想を照葉樹林文化論にまとめ、日本文化の起源論へと議論を進めたことが紹介された。

一方、宮田登については、和歌森太郎の影響を受けた歴史主義民俗学、西山松之助の影響による近世生活文化史への取り組み、さらに文化人類学や宗教学との交流や人間関係の幅の広さを前提とし、文字資料による近世史研究、ミロク信仰の研究、地域民俗学や比較民俗学、都市民俗学、あるいは現代民俗学といった民俗学の新しい分野の開拓など、民俗学に新境地をもたらしたことが示された。そして、坪井と宮田に野口武徳を補助線として加え、民俗学が大学の正規の課程となり、さらには「落日」を経験した民俗学と民俗学者たちがどのように向き合ったかが説明された。

最後に、クライナーが2010年度以来の取り組みの成果を紹介するとともに、今後の研究のあり方が示された。

この研究会により、過去4年間の研究が俯瞰され、さらには真摯な討論を通して、参加者は研究の成果と今後の展望についての理解を深めることとなった。

研究アプローチ③ 「<日本意識>の現在—東アジアから」

アプローチ・リーダー：王 敏

日中の交流は遣隋・遣唐使以来、留学の歴史ともいえる。現在は、相互交流のかたちで若い日本人、中国人が学んでいる。中国で学ぶ日本人の留学生は2014年末の時点で1万7千人であり、日本で学ぶ中国人留学生は現在8万人という。中国人の日本留学生が増えた背景として歴史的な事情のあることはいうまでもない。19世紀末に遡り、清国の若者たちが日本への留学のレールを敷いた明治期を見逃せない。当時の資料などを検証するにつれ日本側の懸命の努力が浮かび上がってくる。

法政大学国際日本学研究所の研究活動の一環として、筆者がチームリーダーを務める東アジア・中国研究チームは2010年度以来の研究活動と成果を受け継ぎ、2014年度には100年前に形成されつつあった留学文化の輪郭及び経験者の思想の遍歴、日本観の生成過程の一端を整理し、記録することにした。その中で、激動の時代に生み出された夥しい事例から、特に法政大学清国留学生速成科の事例を重点に、その一部を「日本意識」という範囲に焦点を当てて考察することにした。そのために行った2014年度の研究活動を以下に略記しておく。

- ①従来の研究活動を継続する傍ら、東アジア文化研究会を10回、共催による国際研究会議を1回開催した。

法政大学国際日本学研究所 2014年度東アジア文化研究会・シンポジウム一覧
於：法政大学市ヶ谷キャンパス

日程	報告者（敬称略）／肩書	テーマ
第1回 2014.4.23（水）	徐 賢燮 長崎県立大学国際交流学科前特任教授	韓国における日本観の変容
第2回 2014.5.28（水）	筒井 清忠 帝京大学文学部日本文化学科教授	昭和維新運動とアジア主義
第3回 2014.6.25（水）	会田 弘継 一般社団法人 共同通信社特別編集委員	世界の日本観の変遷・・・米欧アジアの知識人との対話から
第4回 2014.7.28（月）	于 乃明 国立政治大学日本語学科教授	台湾における日本研究の変容

第5回 2014.8.6 (水)	孫 建軍 北京大学外国語学院准教授	中国における日本研究の変容—北京大学を例として
第6回 2014.10.22 (水)	毛 丹青 神戸国際大学教授	中国若者の日本人観に見る「知の拡散」
第7回 2014.11.5 (水)	呉 端 京都フォーラム研究員	日本意識の変容—漫画・アニメの中国受容を通して
第8回 2014.12.17 (水)	南塚 信吾 法政大学国際文化学部名誉教授	再考・世界史の中の幕末・維新
第9回 2015.1.28 (水)	足立原 貫 特定非営利活動法人、農業開発技術者協会・農道館理事長	“日本現象”を追う一つの視座—人類の行方を見据えて—
第10回 2015.2.28 (水)	谷野作太郎 日中友好会館顧問 元日本国駐中国大使	最近の日本、中国の関係について思う——日中の相互理解の観点から
●国際研究会議 2015.3.7 (土) 3.8 (日)	小口雅史、小秋元段、王敏ほか 日中両国の研究者および大学院生 法政大学国際日本学研究所と四川外国語大学の共催による国際シンポジウム。中国・四川外国語大学内で開催	文化交流の視野における日本学

②研究成果を反映させる出版物（書籍）の一部

2015年3月現在における2014年度の研究成果(出版物の一部)を以下に記す。

- ・ 『「日本意識」の根底を探る 日本留学と東アジア的「知」の大循環』(国際日本学研究叢書19) 法政大学国際日本学研究所、2014年3月
- ・ 『漢魂与和魂—中日文化比較』中国・世界知識出版社、2014年5月
- ・ 『南開日本研究 2014』天津人民出版社、2014年6月
- ・ 日本学研究叢書『日本近現代文学研究』中国・教学与研究出版社、2014年8月
- ・ 「国際日本学とは何か」叢書 『「日本意識」の根底を探る—日本留学と東アジア的「知」の大循環』三和書籍、2014年11月
- ・ 国際日本学研究叢書23 『百年後の検証・中国人の日本留学及びその日本観』法政大学国際日本学研究所、2015年2月

1. 本研究の課題

本研究に与えられているテーマは東アジア地域、とくに中国の日本意識の現在を映し出すことにある。だが、日本一国を中心に「日本意識」を単独に抽出しても一極の研究となり、結果的に不完全な日本意識となる恐れがあり、

客観性に欠けると思われる。すなわち、日本意識そのものを相対に位置づけ、参照枠が前提にされなければ、日本意識を浮きぼりにする土台がなくなり、日本を対象にする課題設定が一方向的になりかねない。

東アジアとの相互認識を映し出す過程がなければならない。日本意識の共有が可能になるためには、内外にとっても相互の参照枠と位置づけられる日本意識の定義を明確化し、異なる地域間の交流という大前提が不可欠である。

中国人の日本留学と日本観を中心に設定する留学文化の一端の輪郭が以上の思考を踏まえた上で、定義不明瞭と捉えられる日本意識につながる断片を反映させるため、法政大学清国留学生速成科の事例を検証することにした。この試みを通して日本意識の現在および今後を考える参考になるべく、研究成果をまとめた。

日本意識というのは他者認識と自己認識との相関関係を比較の基礎とすることで思考可能になると考えられるため、2014年度の課題に関連させ、次のようにアプローチしてきた。

(1) 〈岐路に立つ日本と東アジアを結ばれた「知」の横糸〉では、東アジアにおける「知」の土壌が豊穡なだけに、地質の成分も性格も古来共通している部分が認められる。だが、「古層」のうえに覆い積もった時代の変遷によって固まった地層が除かれなければ、本来の深層すなわち素顔の露出がしにくくなる。本研究ではさらにその深層に迫るための通路の探求を試みた。

(2) 〈東アジアにおける「日本意識」の変容〉では、(1)の「古層」に西洋思考の構築が顕著な現在、もう一度「古層」への回帰が求められるものの、重い西洋の思考を背負っている中で、時には深層の再認識作業の展開がジレンマと化し、残された思想上の課題を超えるエネルギーが必須となる。ここでは、国内外の視点を導入して、変化の中にある日本意識の諸相を明白に提示させるよう努力した。

(3) 外国人にとって日本意識とは自己認識と同体であり、その深層の探求にたどりつく場合には「自分探し」となる。日本と東アジア、お互いの参照枠となり、相互学習、相互発展の「古層」から新たな起点をスタートして未来へ翔けて行くしかない。

本研究を通して深まった認識は以上の通りであるが、残されている課題はま

だ多くある。例えば、国際日本学研究叢書 23『百年後の検証・中国人の日本留学及びその日本観』に収録した法政大学清国留学生速成科に関する論考の一部は本チームの研究に参加した大学院生によるものである。未熟な箇所が多くあるが、いずれもチームリーダーの指導不足を原因とし、多方面からのご叱正を願うところである。

参考資料

王敏「周恩来と法政大学」（国際日本学研究叢書 23『百年後の検証・中国人の日本留学及びその日本観』 pp.119 - 174、2015 年 2 月）

徐賢燮「韓国における日本観の変容」（国際日本学研究叢書 23『百年後の検証・中国人の日本留学及びその日本観』 pp.271 - 298、2015 年 2 月）

研究アプローチ④ 「<日本意識>の三角測量—未来へ」

アプローチ・リーダー：安孫子 信

2014年度の研究活動の報告を、2014年6月12日（木）に、法政大学国際日本学研究所（HIJAS）の主催で行った国際日本学シンポジウム「受容と抵抗——西洋科学の生命観と日本」での成果報告、また、2014年10月30日（木）－11月1日（土）に、法政大学国際日本学研究所（HIJAS）およびフランス国立科学センター東アジア文明研究所（CRCAO）、ストラスブール大学人文科学部日本学科、アルザス欧州日本学研究所（CEEJA）の共催でアルザス欧州日本学研究所（フランス・アルザス・キーンツハイム）で行った、国際シンポジウム「<日本意識>の未来——グローバル化と<日本意識>」での成果報告、を通して行っていく。前者のシンポジウムには日本からの他に、フランスからの計9名が、後者のシンポジウムには日本からの他にヨーロッパからの計16名が参加し、個々が研究報告し、全体で総括の討論を行った。

国際シンポジウム「受容と抵抗——西洋科学の生命観と日本」では、「生命」の科学的な解明と技術的な管理とが格段に進行している現状を踏まえ、西洋科学に発するこのような「生命」へのアプローチに、日本がどのように反応してきたか、また反応しているのかを、思想史、科学史、精神医学、技術論など多くの観点から検討した。<日本意識>はこれまで主に文化現象で検討されてきたが、ここでは本来「日本的」と言うことがむずかしい科学において、とくに生物学・医学において、「日本的」なものが顔を出している諸事象を検証して、<日本意識>をまた別様に確認することを試みた。

まず江戸時代後期に、すでに洋学の影響下で、それへのある意味での反動として、儒学・道教に依拠しつつ、新たな生命観の創出が行われていたことが、佐藤信淵の生氣論を通して示された。また時代は飛んで、現代日本人がロボットに抱く‘生命観’や‘身体観’の検証が行われた。そこでは、「ロボットを葬る」あるいは「ロボットと友達になる」といった日本人に独特の‘生命’や‘身体’への感受性が吟味されたのである。

他方ではこのような生命観・身体観が、よくも悪くも、日本人の社会性（「国体」といった概念にさえ行き着く、きわめて有機的な社会性）と分かちがた

く結びついていて、例えば、ダーウィニズムが導入時から、社会ダーウィニズム的色彩の濃い解釈をされたこと、また、大震災に続く福島原発事故後に、科学者たちが科学的真実に向かわずに、社会に波風を立てずただ保身にだけ走っていることが、負の側面として指摘された。

このような生命観・身体観はさらに、実践においても、理論においても、二元論的な対立・分裂はできるだけ回避しようとするものとも主張された。実践の面で言えば、それは、例えば、日本の精神科病院における、病院と外界との壁を破ろうという移行空間創出の試みに認められると指摘された。また理論の面で言えば、主体を歴史的な地盤の上において、意識を、身体や行為とつなごうとする西田幾多郎の「行為的直観」の思想、さらにその「行為的直観」を補完する、主客をつなぐ構想力の働きを重視する三木清の思想にそれは窺われると指摘された。そしてそれを改めて建築の実践の場にもたらそうと試みたのが、黒川紀章の共生 (symbiose) の思想であり、彼のメタボリズム運動だったのである。

以上、ここまでの議論を受けて、<日本意識>の将来への展望をさらに行ったのが、国際シンポジウム「<日本意識>の未来——グローバルゼーションと<日本意識>」であった。グローバル化という時代の潮流の中で<日本意識>は今後どこに向い、どこにどのように位置づけるのか、さらには<日本意識>にそもそも未来はあるのか、といった諸問題が、思想、歴史、文化、政治、建築、工学、環境といった諸側面から検討された。

新しい<日本意識>の依拠すべき場所として、「中央に対する辺境」でありかつ「内なる植民地」である東北地方が、また沖縄が取り上げられた。中央政府の支配を受けた歴史を有するこれら「辺境」に位置する共同体に潜む強靱さが、「持続性」の観点から考察された。この場合、このような「辺境」における<日本意識>のあり様を探るには、文化人類学を軸にする「学際的共同調査研究」が有効であろうということが、また主張された。実際、「辺境」においては、自然と文化、空間性と時間性の間の亀裂もまだなく、両者の間に支配・被支配の対立もまだ大きくは存在しない。人間も、心身を携えてそこに宿っている。そこは総合の場なのである。こうして、このような場を<日本意識>との関係で自然との関係で改めて考えれば、新しい<日本意識>は、和辻哲

郎が言う意味での「風土」の観点に立つべきであるという事にもなるのである。

また、「辺境」と同時に持ちだされたのは「周辺」と言うことである。すなわち新しい〈日本意識〉は日本の「周辺」、つまり韓国・中国を含む東アジアの枠組みで考慮されていくべきであるとも主張されたのである。日本的なものの多くは、実は起源においてすでにアジア的なのである。また、今日では、日本的なものの多くは、結果としてアジア的なものになっている。このことと裏腹のこととして、同時に、戦前・戦中の「近代の超克」の〈日本意識〉や、戦後の被害者意識を先立てる修正史観的立場が、アジアを日本の外に追いやっているまさにそのことにおいて、批判的に検討された。それらは新しい〈日本意識〉にはなりえないのである。

さらに、このような〈日本意識〉が方法として用いていくべきことがらも論じられた。動的で、可塑性を担保する限りでの「種の論理（田辺元）」や、分断に働くイデオロギーへの「批判」、分けて（分析して）わかろうとするのではない「見立て」の立場、「循環的時間」や「二次元的空間」が取り上げられた。

このような方法はすでに実践例を有していて、そのことで詳しく示されたのは、建築であり、ロボットであった。日本の建築そして日本のロボットは、他とは違う諸特徴を有していて、それらは未来にも及ぶ〈日本意識〉の核のようなものをすでに分かち持っているのである。

ただ、シンポジウムが同時に問うたのは、そのような〈日本意識〉に開きを担保することでもあった。〈日本意識〉が閉じてただの自賛に帰着することをどう避けうるか。この開きに保証を与えるべき枠として、シンポジウムがあらためて提示したのは、「東北地方」であり「沖縄」であり「東アジア」である。われわれはこうしてあくまでもモデルとしてではあるが、核も開きも有する、あるべき新しい〈日本意識〉の姿にここで接しているのである。

「電子図書館の構築」の現状と課題

小口雅史

電子図書館担当部門では、本戦略的研究基盤形成支援事業開始当初から、国際日本学研究所のサーバー室に、基幹となる aterui サーバーをはじめとして、画像データ（静止画ないし動画）をも大量に蓄積でき、かつそれを高精度に処理できる NAS（Network Attached Storage）その他のハードウェアを準備して、インターネットを通じて研究所での研究成果を、世界に双方向的に発信・受信できる体制を整えると共に、能楽研究所・沖縄文化研究所等とも協力して、国際日本学研究にとって国際的に価値あるコンテンツ・データ類を整備・公開することを目的として活動してきた。

戦略的研究基盤形成支援事業を分担する研究アプローチ①～③を上でまとめて総括する上部構造の役割を担うのがアプローチ④であるとすれば、電子図書館担当は、逆に下でそれらを支える役割を担っている。もちろん戦略的研究基盤形成支援事業を支えるだけではなく、これまで投資して準備してきた研究所内の設備を有効活用するためにも、本研究所がこれまで成し遂げてきた諸研究の成果に基づいて制作されたデジタル・データをも、引き続き維持・増強する役割を引き続き担っている。データベースは維持されてこそ意味があるからであって、本戦略的研究基盤形成支援事業が終了してから後も、この方針はずっと貫いていく予定である。

なおこの戦略的研究基盤形成支援事業実施期間中に、サーバー回りの全面改修を施し、OS は開始当初の Windows Server 2003 から 2008 にバージョンアップした。Windows Server 2013 の採用は諸般の事情により見送った。

まず本研究所サーバーにおける公開用のコンテンツとしては、サーバー運営開始当初以来、①国際日本学研究に資する、国際日本学研究センターを構成する各研究所（国際日本学研究所・能楽研究所・沖縄文化研究所）の画像類、②研究成果を統合して国際的に活用してもらうためのデータ類、③国際日本学研究を進展させるための研究成果データベース類、④国際日本学研究者自体のデータベース類、の四つを想定し、そのすべてについて公開作業を実施してきた。

またこれらは研究所のサーバー上のシステムとしては、FileMaker 系のデータベースと、NAMAZU 系のデータベースとに分かれる。大まかに言って、画像を含むもの（または将来含む可能性のあるもの）が前者、テキストベースのデータが後者となっている。

コンテンツ①については、かつて日立製作所がサーバー内に設置した“Digital Library”というシステムによって公開してきたが、より利用しやすい形に変更するために、従来公開してきた個別 JPEG 画像を、高精度を保ったまま典籍毎にまとめることのできる PDF ファイル群にあらたに変換して 2009 年中に法政大学図書館サーバー内に設置された本学の学術研究関係のリポトリに移管済みである。

なお能楽研究所所蔵資料については、冒頭部画像付き目録データベースもスタンドアロン版の FileMakerPro をベースに制作したものを、aterui サーバー上で FileMakerServer Advanced12 を用いて変換して別途公開している。

コンテンツ②については、国際的な研究協力の成果の一つである「在ベルリン・吐魯番漢文世俗文書データベース」を構築、引き続き拡充している（当初の調査資金は小口を代表とする科研費による）。これはベルリン国立図書館やベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー、あるいはベルリン国立アジア芸術博物館などの施設に架蔵されている、中国西域の吐魯番およびその周辺出土の漢文世俗文書断片群を整理して、本来の書名を解明し、さらにはその全文テキストを精細な画像付で公開しようとするものである。これらの文書調査は、吐魯番地域と同じく中国律令制を継受した日本古代史とも深い関係を持ち、さらにドイツとの国際的な協力によって成り立ったもので、国際日本学研究の一つの新しいモデルとなるものであった。これまた古代における日本意識を探る一つの素材ともなり得るものである。

これまで画像は権利関係の問題があって公開できずにいたが、現在ではその問題もクリアされ、全点について新たに鮮明な画像を表示させるシステムとして再構築され運営中である。画像が重要な要素になっており、FileMaker ベースで作業がなされている。

現在、登録文書数は 826 点。ただしさらなる拡充のためには、新たな科研費による調査が必要で、現在模索中である。また精密なトレース図や全文デジ

タルテキストを順次、内部で蓄積し続けている。

コンテンツ③については、日本のなかの異文化の代表的存在である北方史分野を中心に、弥生時代以降、近世にいたるまでの時代を研究した文献を網羅し、柔軟に検索できるシステムを再構築して、それを世界に向けて公開することによって、国際日本学研究所の進展に資する努力を続けている。さらにそれを拡充し、およそ日本古代史に関わる全ての研究についてのデータベースの構築にも入り（そのなかには「日本意識」に関するものも多数含まれている）、試験公開に成功し、引き続き拡充している。本事業最終時点での登録データ数（内部レベルで）は、古代北方史関係研究文献目録データベースが20,933件、中世津軽安藤氏関係研究文献目録データベースが1,235件、近世アイヌ史関係研究文献目録データベース〔試行版〕が8,626件、日本古代北方考古学関係研究文献目録データベース〔岩手県分・試行版〕が313件、日本古代史関係研究文献目録データベース〔試行版〕が210,730件である。なお既入力個々のデータについても、以前のものを精査してそれぞれに相当の修正をほどこしている。

これらはすべてNAMAZUベースで作成されている。なお検索のための単語分割にはKAKASHIを用いているが、デフォルトの辞書をそのまま使うか、こちらで用意した歴史的専門用語の辞書を使うかで試行錯誤が続いているが、現時点ではデフォルト辞書で運営中である。

またこれらとは別に、北方世界特有の土器である続縄文土器の、後期のデータベース「後北式・北大式土器を中心とする遺跡・遺構・遺物データベース」を試験的に公開している。まだ実測図の公開許可を得る作業が続いているため、土器の画像自体は一般公開できないが（内部的には実装済）、土器に関する固有データはすべて公開されている。現時点では北海道と青森分 546 件を公開している。また遺跡の分布図も作成して研究の便宜を図っている。さらに北東北の続縄文土器について資料の蓄積中である。

コンテンツ④については、国際日本学研究所に従事している研究者のデータベースを構築することによって、世界のどこにどのような分野を対象としている研究が存在するのかを自由に検索できるようにした。これによって新たな国際協力による研究連携が可能になり、国際日本学研究所の進展を促進する準備を

整えることができた。データ数は昨年と同様で1560件。ただし件数は同じでも一部細かい改編が継続的になされている。このデータベースもFileMaker12で作成されFileMakerServer Advanced12を通して公開されている。

本電子図書館担当では、以上の公開用のデータベースの他にも、内部の共同研究者のために、本稿冒頭でも触れたように、NAS (Network Attached Storage) によるデータの共有を継続的に実施している。現時点では主にアプローチ(1)と本電子図書館システムで利用されているが、各アプローチ内の大量のデータを電子的にここに保管しておくことによって、いつでも過去の研究の内容に遡ることができ、それを踏まえての研究の前進が図られるように工夫されている。たとえば過去の研究会レジュメ(2010年度以降)をすべて電子化して、内部のメンバーで共有したり、収集した和本の高精細画像や巨大な地図データをここにおいて、内部メンバーであれば自由に閲覧して研究素材として活用できるように配慮している。和本や地図類については、著作権の問題がないので、近い将来の一般公開を企画している。

なおこれらとは別に、2010年度から3年計画で採択された文部科学省(後に学振へ移管)「国際共同に基づく日本研究推進事業：欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究点」の調査成果を共有するためのデータベースも世界に向けて本格的公開運用を開始した。画像を含むのでFileMakerベースで作業してきたが、今後の保守を考えて、最終的には公開用のデータをPHPシステムに移植して運用している。このデータベースもまた、日本意識解明のための有力な素材を今後とも提供していくことになる。現在のトップ画面をここに掲載するが、現状では、BROWSE ボタンを押すと総合カタログのように最初からパラパラと画像をめくっていく閲覧方式、特定のデータを検索するにはSEARCH ボタンから入るという2形態に分けて設置されているが、前者については現在博物館を指定するなど、もう少し実用性を高める方策を検討している。